



バルザック★★

農 民

ゴリオ爺さん

水野 亮 訳

世界文學大系

世界文学大系 24

バルザック ★★



世界文学大系

昭和38年4月30日発行

訳者 水野 亮

発行者 古田 晁

印刷者 山元 正 宜

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話(291)局 7651

目次

農民

水野 亮訳 5

ゴリオ爺さん

水野 亮訳 205

バルザック

水A・テイ
野 ポーデ
亮訳 368

解説

水野 亮 381

裝
幀
庫
田
發

バ
ル
ザ
ツ
ク
★
★

意を表するよすがとしたいのであります。

ド・バルザック

第一編 土地は争いの種

第一章 城館

ナタン氏あて

エーグにて、一八二三年八月六日

親愛なるナタン君、勝手な空想を文章にして読者に甘美な夢を見させるのが君の仕事だが、僕はひとつ真正銘の真実というものを使って君を夢心地にさそってみよう。君はこの手紙を読んで僕にいうだろう、現世紀ははたしてかような夢を一九二三年のナタンやブロンデにこのすことができるかどうかとね！ たえばフロリーヌといったような女が、朝ふと眼をさましてみたら、財産譲渡契約によってエーグの館みたいにりっぱな館がいつの間にか自分のものになっていた、——十八世紀にはこんなことがザラにあったものだ。おそらく君は、いまさらのように、そういう時代と今のご時世とのへだたりを考えてみることだろう。

ナタン君、パリからざつと五十里、ブルゴーニュ州のとつぎの国道にそつて、緑色にぬつた柵でつながっているというか、仕切られているというか二棟の赤煉瓦の亭が建っている。

この手紙が朝のうちに届いたとしたら、まだ寢床のなかの君の眼の前に、その亭の姿が浮かぶだろうか。……僕はそことて乗合馬車からおろされたのだ。

亭の両側にうねうねと生垣がうねっている。乱れた髪の毛のような野いばらが、そこからはみ出しているし、あちこちに若葉の小枝が勝手な向きに伸びている。溝の斜面には美しい草花が、眠ったように動かない緑色の水に、茎の根本をひたしている。生垣は二つの森を結びつけるようなふうには、右にのび左にのびて、それぞれ森のはしまで達している。この生垣に取りかこまれている二つの牧場は、多少開墾の手が加わって出来あがったものに違いない。

ガランとして人気がない、埃っぽい亭のところから、百年の星霜をへたかと思われる楡の木のみごとな並木道がはじまっている。饅頭笠みたいななかつこうの梢がたがい枝を差しかわして、長いトンネルをつくっている。並木道には草が生いしげっていて、馬車のわだちの跡さえろくに見えないくらいだ。楡の樹齡といい、左右二条の歩道の広さといい、亭の由緒ありげな姿といい、平の装飾石積み茶がかった色合いといい、このあたりのすべてが、王侯の構えともいふべき城館の、やがて眼の前に現われることを語っている。

前にいった柵に行きつく前、ちよつとした丘——われわれフランス人がさも自慢らしく山といたがるような丘のてっぺんから、すでにエ

ーグの長い谷間が見えていた。僕が駅馬車乗りすてた駅継ぎ場のクーンシュの村は、そのふもとにある。国道は、エーグの谷間のつきるところでぐるりとまがって、都役所のあるラ・ヴィル・オー・ファイという小さな町へまっしぐらに走っている。僕らの友達のリュポールの甥が君臨している町だ。地平線を見わたすと、一条の川にそって丘陵が長々と延びている。そして丘には森が果しなくつらなつて、この豊饒な谷間を見おろしている。モルヴァン連山と称せられる、スイスの国を小さくしたような山々が、この谷間をまた遠くから取りかこんでいる。鬱蒼としたそれらの森は、エーグの土地やロントロール侯爵やスーランジュ伯爵の所有で、彼らの館や荘園や村々をはるかへだたつた高みから見おろすと、ヤン・ブルーヘルの描いた例のいかにも奇妙なこしらえ物らしい風景画も、まんざらの絵空事とは思えなくなる。

君は、イスパニアのお城(空想)をフランスにいながらわがものにしたといつたことがあるね。このような細目にわたる描写によつても、そういうお城のことが記憶に浮かんでこないようなら、君にはこの手紙、——茫然自失したパリのこの叙述を読む資格がないわけだ。芸術と自然がたがい他をそこなうことなしに渾然と融合して、芸術は自然らしく見え、自然はまた芸術的であるような田園に、僕はとうとう足を踏み入れることができたのだ。僕たちがあつた種の小説を読んでしばしば空想したオアシス、

——きらびやかで豊かな自然、混乱をとまわらない無限の変化、どこかしら野生的で、髪を振りみだしてよう、秘密ありげで、月並みでないあるものに、出くわしたわけだ。柵をまたぎたまえ。そして進もう。

並木道に日の光が差しこむのは太陽が昇るときと沈むときだけで、光線は斜めに縞目を描いて差しこむのだが、もの珍しいままに並木道のずつと先まで一目で見通そうとすると、小高くなつていゝ地形のために視界をさえぎられてしまった。ところでそこをぐるりと廻ると、長い並木道はちよつとした森のために断ちきられて、四辻に出る。そのまんなかに石造の方尖碑が立っている。しかもその形たるや、感嘆符が永遠にそこに突つ立つてでもいるようなかつこうなのだ。てっぺんは棘がたくさん植わっている球の形をしていて、(なんとという思いつきだらう!) 台座のたたみ上げた石と石のあいだから季節によつて緑色がかつた花や黄色い花が垂れる。たしかにエーグは女の手で、さもなければ女のために建てられたものだ。男にはこんななまめかしい考えは浮かんでこない。エーグの設計に当たつた建築家は、何かきまつた命令でも受けとつていたのだから。

まるで番兵みたいに構えているその森を通りぬけると、今度は気持のいい窪地へ出る。奥のほうに小川が音を立てて流れていて、苔の色のみごとな石造の太鼓橋がかかっている。この苔むした橋は、「時」がこしらえたモザイクのな

かでもいちばんかわいらしい細工だ。並木道は、ゆるやかな勾配を描きながら川の流れをさかのぼつていく。遠くの方に、まず最初の画面が現われる、——水車小屋と堰、そのまわりの土手や木々、あひるや洗濯物、わらぶきの家、網や生簀いすなど、それとさつそくもう僕のほうをジロジロ見ている水車小屋の小僧も勘定にはいる。田舎では、どんな場所にいようと、また近所にだれひとりいそうもないときでも、縁のない木綿の帽子の陰から二つの眼が、じつとこちらを見はつている。百姓は鋤を手から離す。ぶどうづくりはエビのように曲がつた背中をのばす。山羊や牛や羊の番をしている小娘は、柳の木によじ登つて、スパイのような真似をする。

やがて間もなくこれまでの楡並木はアカシヤの並木道に変わつて、鉄の格子門に達する。習字の先生のお手本でよく見かけるが、あのへんにくるくる巻きあがつた線によく似ている透し彫り風の線細工、——この格子門はそういう線細工の製作がおこなわれた時代のものだ。門の左右に空濠が延びていて、両側の土手のいただきには、見るも恐ろしい槍、本当の鉄の忍び返しが植えてある。門の両側にはまたそれぞれ門番小屋が付属しているが、それはちよつとヴェルサイユ宮殿の門衛詰所のような式の建物で、とつともなく大きな飾り瓶が屋根根のつかつている。格子門の唐草模様は、せつかくの金がすでに赤味をおびて、ところどころ錆のため色が変わつていゝ。「並木道の門」という名がつ

いているが、もともとこれは大王儲(長子)、大王の後をつぐにたがこしらえたもので、いかにも大王儲の手に成った門らしい風情があり、金の色が変わつていようと錆が出ていようと、いよいよもつて僕の眼にはりつぱに見えた。空濛のそれのそれはすれから今度は粗塗りもしない塀圍いが始まる。塀の赤味がかつた土の漆喰にはめこんである石は、火打石の黄褐色だの、白聖の白だの、礪石の赤褐色だの、無数の色合いと勝手さままな形を見せている。最初、荘園は陰気な感じをする。五十年このかた斧鉞の音を聞かない木々や蔓草が、塀圍いを隠しているのだ。森にかぎつて現われる不思議な現象というものがあるが、かかる現象によつてまたもとの原始林に戻つてしまつたのだともいえるだろう。つたがおたがいにからみつきながら、木の幹を一面におおっている。木の枝が二股になつていて、ほどよい湿度で根が下ろせそうな場所には、きまつてあでやかな緑の寄生木が垂れ下がっている。僕は巨人のような常春藤を見つけた。パリから五十里ぐらい離れていて、地価がそう高くないから土地を節約しなくともすむような場所でないかと花をつけないうような、野生的な唐草模様だ。こんなふうになると、芸術というものも広い土地を必要とするわけだね。ここでは、だから手入れのしてあるものは何一つないし、熊手をういた形跡も見られない。わだちのあとには水がいっぱいたまつて、かえるがのんきそうにおたまじゃくしをかえしている。花のきれ

いな森草が生えているし、ヒースも、一月に君の部屋の暖炉棚にのせてあるやつほどに美しい。あれを君は、フロリーヌが君のところへ持ってきた例の贅沢な飾り鉢に入れておいたつねね。森のかかる神秘は、人を酔ひ心地にし、つかまえてどころのない漠然たる欲望をおこさせる。森のいろいろな香気は、詩情を解する人たちが珍重する匂いだ。彼らは、一点の塵をもとどめぬ清らかな苔や、猛毒の隠花植物や、湿つた土、薄荷とかよもぎ菊、いぶきじゃこうそう、沼の青い水、こうほねのまるい星形といったようなものを喜ぶ。繁殖力の激しいこれらの草は、君の鼻先に強く匂つて、ある考えを、——おそらくはそれらの植物の魂そのものを君の手にゆだねる。僕はそのとき、この紆余曲折する並木道を波のようにうねりながら通りすぎるばら色の女の着物を、ふと思つたものだった。

並木道は不意に最後の木立に突きあたると。そこには樺の木やポプラや、枝葉のゆるいいろいろな木、——枝ぶり木ぶりの優雅な、理知的な種族の木が揺れ動いている。つまり自由恋愛の木だ！　そこから、睡蓮や大小いろいろな葉をつけた草が一面に浮いている池が見える。池には、セーヌ河の貸ボートみたいにあだつぼくて、くのみを蔽ふみたいに軽い、黒と白にぬつた舟が、なかば腐りかけて浮かんでいる。池の向うには、一五六〇年と建造の年をきさんだ、美しい赤煉瓦の城館がそびえている。壁面は、平の石積みで飾られ、隅の裝飾石積みと窓には額縁がつい

ている。その窓たるや、いまだに小形の菱形ガラスがはまつている。(おお、ヴェルサイユよ、だ！)石のきり方は兜巾切りだが、ちょうどヴェネチアの大統領官殿を嘆きの橋の正面から見たときのように、中くぼみのきり方だ。この館の建て方で規則正しいのは中央の建物だけで、尊大ぶつた外階段がそれについている。左右にひろんで急にひろがつていまるい手摺り子がならんでいる。この本館には、鉛が花模様を描いている尖塔つきの櫓と、多少ギリシア風の廻廊や柱頭のある近代式の分館が付属している。そこにはなんらの均斉も見られない。行き当りばつたり寄せ集めたそれらの建物は、緑のこい木々で取りかこまれてい。木々の茂みは屋根の上で褐色の檜のような百千の小枝を振り動かし、苔を青々とした色に保ち、思はずも見とれるような壁のおもしろい割れ目を生動せしめる。大きなバラソルのように梢がこんもりしげつた幹の赤い赤松がある。二百年もたつたかと思われる杉、しだれ柳、ノルウェイ樅、そのノルウェイ樅よりも丈の高いぶなの木などがある。それから本櫓の手前には、きれいに刈りこんだ水松とか木蓮とかあじさいとかいう、一風も二風も変わった灌木がある。その水松を見てみると、今は取りつぶされて跡形もなくなつた昔のフランスふう庭園が思い出される。要するにここは、すべての英雄のように一躍して流行児になつたかと思うとやがて忘れられていく園芸界の英雄

たちの陸兵院だ。

建物の一角に奇妙な彫刻のついた煙突があり、煙がもくもく吹き出しているので、この心地よい眺めが芝居の書割でないということがわかった。厨房がそこに生きた人間の住んでいることを語っていた。サン・クルーへんへ出かけても、まるで極地へでもいったような気がする僕だ。

そのブロンデがブルゴーニュの燃えたつような風景のまっただなかにいるところを想像してくれたまえ。太陽は刺すように強烈な熱をそそぎかけている。かわせみは沼のほとりにとまっているし、せみは歌い、こおろぎは叫んでいる。何か種子の入っている莢がパチパチはじけ、けしはモルヒネを樹液のようにしたたらしている。すべてがまっ青な空にうきうき浮き上がっている。台地の赤味がかった地面には、虫や花を酔わせ、人間の顔を黒くやき、眼をそこねるあの自然のポンズの愉快なかげろうが踊っている。ぶどうは玉をつづつたようにみのっているし、

枝は白糸で織ったヴェールのような葉を見せているが、その織り方の繊巧なことは、レース製造工場も三舎をさげるくらいだ。最後に館の建物にそって青い色の飛燕草や、あかね色の金蓮花や、スイトピーが輝くばかりに咲きほこっている。遠くの月下香やオレンシの木が空気をかおらせている。森の木々がまず、詩的な香気から、いよいよ草花の後宮の刺激的な香料がやってきたわけだ。——さて最後にまるでこれら

の草花の女王のように、白い着物を着て、髪をたばねたまま帽子も何もかぶっていない女の姿が、外階段のつべんに見える。裏地に白い絹をはった日傘の下からのぞいている顔は、しかしその絹地よりも白く、足もとに咲いているゆりよりも白く、手摺りのあいだまであつかましくも生え伸びてきている星形の花弁のひらいたそけいよりもまだ白い。ロシア生れのフランス女で、彼女はそのとき僕に、「もういらっしやらないのかと思いましたわ」といった。曲り角のところから、すでにもう僕を見ていたのだ。あらゆる女は、——この上なしに無邪気な女でさえも、演出というものをなんと完全に心得ていることだろう。下男たちが食事の支度にとりかかっているらしい物音がしたが、それによって見ると、駅馬車の到着まで昼餐を遅らせていたものらしい。彼女は僕を出むかえにそのへんまで出てくるほど大胆になれなかったのだ。

これがわれわれの夢想ではあるまいか。これこそ美をそのあらゆる形において愛する人たちの夢想ではあるまいか。——ルイーニがサロノにあるあの美しい壁画の「聖母マリアの婚姻」にこめた清らかな美、ルーベンスが「テルモドンの戦い」と題した乱闘の図のために工夫した美、前後五百年にわたる丹念な工事がセビリヤとミラノの大伽藍においてつくり上げた美、ラセン人がグラナダにきざぎざあげた美、ルイ十四世がヴェルサイユにきざぎざあげた美、アルプス連峰の美、さてはリマーニュ平野の美など、

こうしたさまざまな美を愛好する人すべての夢想では？

この地所は、べつに高貴の方のご料地くさいところが多分にあるわけでもなく、そうかといって銀行家の所有地らしい俗臭ふんふんたる趣きがあるわけでもないが、さる高貴の方と徴税請負人が住んでいたことがある。くだんの事実、この地所がどれほどの広さかということの説明するのに役立つわけだが、事実二千エクタールの森、九百アルパンの荘園、水車小屋、三つの小作地、クーシュにある非常に広い農園、それからほうほうにあるぶどう畑などが、この地所に属している。年に七万二千フランの収益は当然あつてもいい土地なのだ。ナタン君、エーグというところはざつとこういう土地でね、僕は二年この方しょっちゅう遊びにこいときわわっていたのだが、今やその館の、心を許しあつた友達だけにとっておく「ベルシアの間」という部屋に陣取っているわけだ。

クーシュの方角にあたる荘園の高みに、十二カ所ほど、底まではっきり見えるくらい水の流れいな泉がわいている。モルヴァン連山から脈を引いているのだが、これが荘園の谷間やすばらしい庭園の裝飾となつて流れ下つてから、残らず例の池へそそぎこむ。エーグ（古橋で）という名前は、これらの魅惑的な水の流れからきている。旧記には Aignes Mortes（死んだ水、す）の反対の Aignes Vives（生きている水、す）とあるけれどもその Vives をばらばらしてしまつたのだね。

池は、広くてまっすぐな掘割によって、例の並木道にそった川へ流れこむ。掘割の兩岸にはしだれ柳がずっと植わっている。そんなふうな飾りがあるので、掘割は心地よい効果を生み出す。つまりポートのベンチに腰をおろして乗っていると、大伽藍の身廊にでもいるような気になるのだ。掘割のはしにある館の母屋は、伽藍の内陣というわけだ。夕日がところどころ物蔭にさざざられたオレンジ色の光を館へ投げて、窓のガラスを燃え立たせでもすると、火炎式の焼絵ガラスの窓かと怪しまれるほどだ。掘割のはしに、ブランジーの村が見える。六十戸ばかりの家と、フランス風のお寺がある。フランス風というのは、すなわち手入れのわるいということとで、木道の鐘樓の屋根瓦はこわれたままになっている。町方風の家が一軒と、それから司祭館が、やや群をぬいて光っている建物だ。とはいえ、ブランジーはかなり広い村で、ほかにもまだ二百戸ばかりほうほうにちらばっている。そして、まえにいった部落のほうに村役場がある。この村はあちこちで小さな菜園によって区切られ、道はまた道で、果樹によってその所在を示している。菜園はまったくの百姓の持つ菜園で、草花だの、キャベツだの、玉ねぎだの、ぶどう棚だの、すぐりの木だの、うんと積み上げた肥料わらだのといったふうに、なんでもある。村はいかにも素朴に見える。田舎くさい。画家はしきりに題材にしたがる簡素でいてしかもみやびやかな趣きをそなえている。最後に遠

くのほうに、ちようどトウワヌ湖畔の工場のように、広い池にのぞんだスーランジュの小さな町が見える。

この莊園は、それぞれみごとな様式の、四つの門を持つているが、もし君が園内を歩き廻りでもすれば、神話のアルカディア(牧歌的)は君にとつてまるでポース平野みたいに陳腐なものに変わってしまうだろう。アルカディアはブルゴーニュにあって、ギリシアにはない。アルカディアはエーグにあって、ほかのところにはない。小川がいくつも合流して出来た川が、莊園の低い場所をうねりながら横ぎって、園内にみすみずしい静けさをあたえ、隠棲の場所のような感じをつくりだしている。そのせいか、とある人工の島に一棟のささやかな僧院風の別荘が建っているのが、いよいよもって例のシャルトルズを思い出させる。別荘は、はなはだしく荒れ果ててはいるが、さすがに堂の内部は、これを命じて建てさせたあの酒色三昧にふけった金融業者の名をはずかしめないだけの、優雅なつくりをとどめている。エーグの土地はね、君、一度だけルイ十五世の臨幸をおおぐために二百万フランの黄白を散じたあのブルーレの持ち物だったのだよ。この美しい場所を作り出すために、どれほど多くの物狂おしい情熱や、出色の機才や、好都合な情勢などが必要とされたことだろう。アンリ四世の一寵姫が、現在の場所へ館を建てなおして、それに森をつけ加えた。エーグの土地をあたえられた大王儲の愛人のシ

ョワン嬢は、さらに数カ所の農園を加えて大きくした。ブルーレはオペラ座の名高い歌姫のために、パリの妾宅に見られる癡りすぎるほどの意気な飾りを、この館へ取り入れた。地階がルイ十五世式に修復されたのは、ブルーレの力によるのだ。

僕は食堂の美しい眺めにあっけにとられてしまった。まず最初眼をひかれたのはイタリア風のフレスコ天井で、そこにはこの上なく気まぐれな唐草模様飛びかけている。裾のほうの木葉模様に変わっている化粧漆喰の女人の像が、ところどころ間をおいて、果物籠を支えている。果物籠はまた天井の葉形飾りを支持している。それぞれ女人像をへだてる羽目板には、無名の画家の手になるみごとな絵がはめ込まれ、食卓の誇りとする珍什佳品、鮭だの、猪(シカ)の首だの、貝類だの、要するに無数の食用品が描き現わされている。それらは不思議な類似から男と女と子供を思い出させ、シナという、僕にいわせればもっともよく裝飾を解する国の奇怪きわまる想像と優劣を争っている。女主人の座席の足もとには、召使を呼ぶためのバネ仕掛けの呼鈴がある。召使たちが、ただ呼ばれたときだけ食堂へ入ってきて、それ以外は食卓をかこむ人々の会話をじやましたり姿勢を崩させたりしないようにという配慮からだ。扉の上の飾り板には、なまめかしい光景が描かれている。扉や窓の額縁はすべて大理石のモザイクだ。部屋は下から暖めるようになってい。窓の一つ一つに心地

ら、その断頭台からも忘れられ、貴族階級や文
学者や財界からも忘れられた歌姫だ。残んの
色香のまだ失せない多くの姳核とおなじように
はかなく忘れられた女だ。彼女たちは、みんな
からチャホヤされた若い頃の罪ほろぼしに田舎
へ引っこみ、もはや取りもどすあてもない愛情
にかえるに別の愛情、すなわち人間くさい愛欲
にかえるに自然に対する愛をもつてする。草花
や森の香や空の色や日さしの移りかわりを見て
暮らす。すべて歌い、ピチピチはね、輝き、萌え
出るもの、——小鳥やかげや花や草木と共に
生活する。いっしょに暮らすといつたって、自
然について何一つ知るわけでもなく、よくわか
っているというのでもないが、それでも愛する
ことに変わりはない。あまりに愛する結果、公爵
や元帥や競争相手や徴税請負人や、ドンチャン
騒ぎや気違い沙汰のせいたくや、模造宝石やダ
イヤモンドや、かかとの高いスリッパや口紅を、
田舎の景色がなごやかなために忘れてしまう。

ナタン君、僕はラゲル嬢の老年時代について、
いろいろと貴重な消息を蒐集した。というのは
フロリーヌやマリエットやシユザンヌ・デュ・
ヴァル・ノーブルやチュリアなどと似たり寄つ
たりの粹筋の女の老境というものが、ときたま
気にかかることがあったからで、いつてみれば、
だんだんと月をかけてゆくを見て、おしまい
にはどうなるのかと心配した子供があったそう
だが、まあそれとおなじようなものだ。

ラゲル嬢は時勢の動きに青くなって、一七九

〇年エーグへ定住するつもりでやってきた。こ
こはブルーが彼女のために買ひもとめた土地で、
ブルー自身も四、五へん彼女と共に夏をすごし
たことがあった。デュバリー夫人(ルイ十五世の寵姫)の運
命が彼女にはよほど恐ろしかったと見えて、持
っているダイヤを地面のなかへ埋めたくらいだ
った。そのじぶんまだやつと五十三になったば
かりで、小間使の言葉によれば、「奥さまがあ
んなに美しかったことはこれまでもございませ
んです」とある。ついでにいうとこの小間使は
憲兵の細君になったのだが、このへんの人はこ
のスードリー夫人を呼ぶのに「町長夫人殿」と、
なんの苦もなくいつてのける。ナタン君、疑い
もなく自然は何か理由があって、ラゲル嬢式の
女をいつまでもだっ子として甘やかしておく
のだね。放蕩三昧の生活は彼女たちを殺すかわ
りに、ぶつくりとふとらせ、いつまでも若さを
保たせ、若返らせさえする。ちよつと見ると彼
女たちの体質は淋巴質(リンパ質)で青白く、筋肉にも引き
しまったところが無いけれども、その青白い皮
膚の下には、驚くほどがんにような骨組みを支
えている神経が隠れているのだ。ある理由から
彼女たちはいつも美しいままでいるが、一方そ
のおなじ理由は貞淑な女をみにくい老婆にかわ
らせる。偶然というやつは、どう考えても道德
的ではないね。

ラゲル嬢はここで一点非の打ちどころない暮
しぶりをした。あの有名な恋愛事件のあととは、
まるで聖女のような暮らし方だったといつてもい

いだろかね。ある晩のこと、彼女は色恋のいざ
こざでやけ半分になって、オペラ座から舞台衣
装のまま抜け出すと、野原へさまよい出て、と
ある道ばたで泣きあかしたことがあった。(ル
イ十五世のころ、色恋の沙汰に悪言を放つもの
なんぞあつたらうか) 晩の空の色なんぞたえて
久しく見たことがない彼女は、いちばんお得意
にしている歌劇のアリアの一つを歌いながら、
東の空に敬礼した。その芝居じみたかつこうや、
舞台衣裳にちりばめてある金箔のきらめきに、
近所の百姓たちは何事かとばかり集まってきた。
そして彼女の身振りや声や美しさにすつかり
どぎもをぬかれ、天使だと思ひこんで、そのま
わりを取りかこんでひざまずいてしまった。ヴ
オルテールのような男がいなかったら、ここに
また一つバニョレ(郊外)の近くで奇蹟がおこな
われたということになるだらう。神様はラゲル
嬢が遅まきながらおこないすますようになった
ことを勘定に入れて、彼女の罪を斟酌するかと
うか、そこはわかかかねる。というのも大革命
前のオペラ座のくろろと女のような、色恋にな
んぞあきあきしている女にしてみれば、そんな
艶事はもうまったく見るのもいやなものだ
らうからだ。ラゲル嬢は一七四〇年に生まれた。
全盛時代は一七六〇年、すなわちなんとかいう
男が、ちよつと名前が思い出せないが) 彼女と
いい仲になったからというので陸軍省の高官と
いわれていたじぶんだ。彼女はこの土地では誰
も知らないラゲルという名前をすてて、エーグ

夫人と名乗ることにした。なみなみならぬ芸術的な好みで喜んで維持をはかったその所有地に、わが身を狭くする上にも狭くして住むためであった。ボナバルトが第一統領となったとき、持っていたダイヤを売りはらって没収教会財産を買い、それでぐつと地所をひろげた。オペラの歌姫が財産の管理に明るいことはまずないので、土地の管理は管理人にまかせっぱなしにしたまま、自分は荘園の手入れとか草花果樹の栽培とか、そんなことにしか力こぶを入れなかった。

ラゲル嬢が死んでブランジーに葬られたとなると、スーランジュの公証人は分厚な財産目録をこしらえた上、はたして自分に相続人があるものやらないものやら知らなかった歌姫の相続人を、ようやくのことでさがし出した。スーランジュというのはラ・ヴィル・オー・ファイとブランジーのまんなかにある小さな町で、郡役所の所在地だ。アミアン近在の十一軒の水のみ百姓がポロ蒲団にくるまって寝ていたところが、ある朝おきてみると金の布に包まれていたという騒ぎになった。さっそく競売の必要が起った。で、モンコルネがエーグの土地を買いつたのだ。モンコルネはスペインやポメラニア出征軍の指揮に当たっているあいだに、動産をも含めてこの土地購入に必要な百万フランほどの金がいづの間に出来ていたのだ。どうもこの美しい土地の所有者はきままって陸軍省と縁がある。モンコルネ將軍は例のなまめかしい地階の感化を受けたものに相違ない。そこで僕はき

のう伯爵夫人にむかって、夫人の結婚はエーグの土地がきめたようなものだと言張してやった。

ナタン君、伯爵夫人の値打を定めるには、その前にまず將軍が気性のほげしい、血色のすこぶるいい、六尺ゆたかの大男だということ、まるまるとこえていて首がふとく、彼の着る胸甲におさまりきれないような、鍛冶屋みたいな肩をもった男だということを知らなくてはならない。モンコルネはエースリンクの戦闘(一八〇九)に際し、——オーストリアではこれをグロース・アスペルンの戦いというが、この戦いで胸甲騎兵を指揮した。このみごとな騎兵団がドナウ河のほうへ圧迫されてしまったときでも、彼はたおれはしなかった。大きないかだにのって、騎馬のままこの河を渡ることができたのだ。胸甲兵たちは橋がこわれていることを知ると、モンコルネの命じるままに、方向転換をこころみ断に出た。あくる日、オーストリア軍は三十何台かの車に、戦死した敵兵の胸甲をいっばいに積みこんで運びさつた。ドイツの兵士どもはこれらの胸甲騎兵のために、一語で「鉄の男」という意味の言葉を発明した。モンコルネは古代の英雄の観がある。腕は太くたくましく、声のよく響くひろい胸、ライオンの頭のような、よく目立つかつこうの頭、声は戦いたけなわなとさきによく突撃号令を下しうるような声なのだ。しかし、彼はしよせん、多血質の男の勇氣しかそなえていない。機才と技倆をかいている。か

りにも將軍と呼ばれるような人たちは多く軍隊の常識により、しよつちゅう危険にさらされている人間につきものの油断のない心構えにより、指揮号令の習慣によつて、その態度風采に一段と衆に秀でたところができてくるが、モンコルネもそういう將軍連とおなじく、見るからに威圧的な、押出しのきく男なのだ。チタンのような男だと思われているが、しかしケニルワース城の入口でエリザベス女王に敬礼するあの紙製の巨人みたいなもので、彼のなかには一寸法師がかくされている(サー・ウオルター・スコットの「小鷹ケニルワース」の一挿話)。怒りっぱい人がはよく、帝政時代式の高慢ちきで兵隊特有の痛烈な皮肉をいい、口答えもすばやいが、手を出すことはなおさら早い。戦場では威風あたりを払っただろうが、家庭ではやりきれない無骨者だ。衛戍地の色恋しか知らない、——神話の巧妙な製造人だった古代人が、マルスとヴィナスのあいだに出来た子供の、エロスをパトロンとしてあたえた兵隊どもの色恋だ。これら宗教年代記のあじな作者たちは、色とりどりの恋愛神をもの一ダースも仕入れていたものだ。そういうエロスたちの父親と属性を研究すれば、もつとも完全な社会的語彙が発見されるだろう。それなのにわれわれは、何か新しい語彙でも発明できるような気であるのだ。ちよと夢でも見ている病人のように、地球が裏返しになって、海が陸地になるようなときでもきが見る海の底に、蒸気機関と大砲と新聞と憲章

が珊瑚の山にうもれているのを見つづけるだろう。

* 私は原則として注をつけることを好まない。以下の注は私があえて自らゆるす最初のものである。しかし、これには歴史的な興味があふくまれているから、いささか弁解の筋道も立つであらう。それにまたこの注によって、戦闘の描写なるものは、かの専門家の無味乾燥な定義とはべつの仕方ですべきだということが証明されると思う。彼らがわれわれにのべる事柄は、じつに三千年この方、軍の右翼が、左翼が、あるいは中央が撃破されたとかされなかつたとかということばかりであつて、兵士そのものについて、その英雄的行為やさまざまな苦しみについて、一言もふれるところが無い。私がかねて「軍隊生活場景」を執筆中であるが、そのために私の作家的良心は、フランス軍や外国の兵士の血のそそがれたあらゆる戦場を親しく見て廻りたいという気持ちを、私に抱かせる。そこで私は思い立って、ワグラムの平原をたずねた。ロバウ島に面するドナウ河畔に達したとき、かほそい草の生えている岸辺に、うまごやし畑の広い畦のよゆうな、土地の起伏が眼についた。そういう耕作法でもあるのかと思つて、その土地の高低が何に由来するのかと思つておりました。「あそこには親衛軍の胸甲兵が眠つております。お眼にとまりましたのは兵卒どもの墓でございます」と、案内に立った百姓が答えた。紋切形の言葉だったが、それを聞いて私はゾツとし

たのである。通訳の勞をとられたフレデリック・S公爵がそれにつづくわえられた言葉によれば、この百姓は戦没兵の胸甲を山と積みあげた荷車の一隊を率領した男だといふ。しばしば戦争につきまとう不思議な因縁ともいふべきだが、われわれの案内に立ったこの百姓は、ワグラムの戦いの当日、ナポレオンのために朝飯の用意をしたのであつた。彼は貧しい水のみ百姓だったが、牛乳と卵の礼としてナポレオンからあたえられたナポレオン金貨を、大切にもつていた。グロース・アスベルンの司祭は、われわれをかの有名な墓地へみちびいた。そこはフランス軍とオーストリア軍が、いずれも優劣なき勇氣と執拗さともつて、流血になかば足をひたしつづつ戦つたところである。私の注意はたちまち一個の大理石標に集められたが、そこには戦闘の第三日目にたおれたグロース・アスベルンの地主の名が読まれた。この大理石標こそ、わが一門にあたえられた唯一の褒賞であると説明しながら、司祭が憂鬱きわまる調子で次のようにいったのも、その場所においてであつた。

「あの頃はみじめともなんともいいよゆうのない時代でした。それといつしよに褒美としてもすばらしいものが予約された時代でした。しかし今はそんな約束なんぞ、てんでかえりみられない時代です……」私は司祭の言葉を率直で、じつにりつぱなものだと思つたが、しかしよく思いかえしてみると、オーストリ

ア王家の一見忘恩とも見える態度にも十分の理由があるような気がした。諸国の人民にしろ國王にしろ、国家存亡の分れ目というような戦いのさいに発揮される獸身的行為のごとくに厚くむくいるところがあるほど、それほど裕福というわけではない。報酬をあてにして事におもむくようなものは、願わくば自己の血の貴重なことを思つて、傭兵隊長にでもなるがよろしい。……祖國のために剣もしくはペンをとるものは、われらの祖先が常にいつたように、ただ最善をつくすことのみを念頭におくべきである。そして単に偶然の幸運として以外、何物をも受けとるべきではない、——よしんば榮譽のごときものでもしかり。

負傷して馬車のなかへかつぎこまれたマツセナが、次のような崇高な訓辭を部下兵士にあたえたのは、この有名な墓地を三度目に奪取しようとして進んだときだつた。——「なはんたるさまだ、馬鹿野郎ども、お前らの給料はわずかに五スーだ。おれには四千方フラーンという金があるんだぞ。だのにおれを前線に打ちすてておくのか。……」サン・クロワ氏がドナウ河を三度泳いで渡つて、マツセナ元帥にもたらしたナポレオンの命令は誰でも知つてゐる。「村を奪回するか、しからずんば死あるのみ。事は軍の興亡に關す。橋梁は破壊しつくされたり」(作者)

ところで、ナタン君、モンコルネ伯爵夫人は